
百合咲く場所

ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百合咲く場所

【Nコード】

N8911U

【作者名】

ミキ

【あらすじ】

男三人の会話メインの短編です。SFと若干のミリタリー成分でできています。

（前書き）

気分転換で書いてみました。

高度50000フィート。輸送機ウォンバーにて通信手、レーザー。携帯機サレナにてメインパイロット、スペクター。同機にてドライバアシスタント、メリー。連続通信時間四五〇〇秒。

『そんで、二月二七日は俺の誕生日です』

「だから？」

『それまでに帰って来いってこと』

「なんで？」

『娘が喜ぶから。お前好かれてるよ、なんでか知らんけど。結婚すれば』

「あつそ」

『そこは「父親が言う言葉じゃねー」とかさ。今なんかやってんの？』

「視覚素子の感度を調べてる」

『それ何回目だよ。発ってから四回以上やってるだろ』

「下、霧すごいだろ。乱反射統制しないとひどいことになる」

『サーモ使えば？』

「霧だつて言つてんだろ。うるさいから切るぞ。通信、終了」

『あ、まて』

スペクターは容赦なく、ディスプレイ横の縦に並んだ四つのディスプレイスイッチを全てオフ、最後の一つをオンに傾ける。

「聞いちやらんねえな」

後座に座るメリーがつぶやく。

「あのおっさん、ガキができてからいつつもノロケ話ばっか。うんざりだ」

「付き合い長いな。それじゃあ七年か」

「深さではお前のほうが上だ。いや、下か？家に呼ばれたことなんて一度もねえ」

「俺も一回だけだ。娘さんにいたく気に入られちゃって。まあ、悪い気はしないな」

「その気があんのか？」

「子供はかわいいだろ」

「お前が言っと、ケンゼンに聞こえるな」

「お前が汚れてんだよ」

メリーはヒヒヒと笑う。マスクの反射から聞こえるそれは間違いなく悪魔の微笑である。

「あーあ今年もこれで終わるかあ。結局従軍従軍で家にも帰れやしねえ。母親にも顔見せないといけないのに」

「へえ」

スペクターの口元がゆるむ。

「意外と家族思いなんだな」

「実を言つとマザコンなんだ。つていうのは冗談で、家族が俺しかないから死なれでもしたら後を追う、だって。やめてくれよホント。そんなのこっちの重荷にしかならねえよ」

視覚素子から複合信号を受信。操縦桿前についたサブ サブディスプレイに3Dマッピングをほどこした直下の地表映像が表示される。

「これはすごいな」とメリー。

「技師軍団にやらせたマッピングよりもズレがない。もったいないな。こんな前線より電子技師やれよ」

「俺はさ、」

スペクターはディスプレイを指でなぞり、

「戦場で死にたいんだ」

「俺を巻き込むなよ？」

「当たり前だ」

「それにしても、戦死願望か。調査団に聞かれたら査定対象だぞ、それ。無線とログ切ってるだろうな」

「たぶん」

「たぶんで」

メリーは慌ててアシスタントディスプレイに通信ログを呼び出す。音声ファイルは二秒で削除。バックアップもない。

「お前が減給されるわけじゃないだろ」

「それでも印象が悪くなる。お前、なんのためにやってるんだこの仕事」

「さあな。聞かれたところで俺はそういう場所に回されるだけだ」
マッピング映像を切り、通常の高度計、気圧計表示へ。

「子供でも作れば、気が変わるよ。レーザーみたいにさ」

「そうかな」

メリーは両手を頭の後ろへ回し、楽な姿勢をとる。

「回線もどすぞ。……おい、レーザー聞こえるか。応答願う」

「あ、やっと繋がった。メイン切るなアホ」

「目的地まで残り八百秒。こちら作戦機サレナ全ての調整と確認を終了。状態データをそちらに送る。再度確認されたし。コピー？」

「受け取り状況まだだ。ちょっと待て」

「おせーぜ相棒」

「相棒は後ろの青くせえガキだろう。あー、できた。送れ」

「送信。メリーが怒ってるぞ」

「うそつけ、どうせにやついてんだろ」

レーザーが正解。

「こちらの中央コンピュータで作戦適応状態だと確認。二百秒前まで現状維持。コピー？」

「ソリッドコピー」

間が続いた。三人誰もが口に出さない。緊張しているわけでも願掛けをしているわけでもない。ただこの沈黙が心地よいのだ。

四百秒前、レーザーが声を出した。

「お前、帰るところがないならうちへこないか？娘に好かれてるし、嫁もお前を尊敬している。あんなに寡黙で真面目な人間を見たことないってさ。話もそれなりにできるし、」

「作戦前だ。そんなこと口にするな」

『このままだと、なんていうか、危ういんだ。死んでもいいみたいな、さ』

「正解」

メリーが横から口を出す。

『お前に死なれたら……。とにかく娘は悲しむし、俺も、悲しい』
「ありがたいな、それは」

『冗談で言ってるんじゃない。とにかくこの作戦が終わり次第、転勤を考えとけ。力が及ぶ範囲なら、俺も推薦状を出す。技術屋連中はお前を欲しがってる』

「そうだな。考えとく」

『本当だな。お前が……。いても……』

無線にノイズが走る。

「おいスペクター、電波妨害だ」

メリーは慌ててチャンネルを切り替えようとする。

「待て。少しだけ時間をくれ」

「少しだけだぞ」

メリーはチャンネルを戻した。

『おい、聞こえるか？ノイズが走ったな今。もうエネミーラインか』

「そうだなレーザー。そろそろ枝がつく。まあこんな会話、聞かれたところで大したことはないが、一応だ。チャンネルもばれるしな」

『帰ってきたら真っ先に俺のとこへこい。それじゃあ切るぞ。グッドラック』

「了解。そちらも」

無線を切り、まっさきにチャンネルをひねる。

「大丈夫だつけられた形跡はない。いまのうちに攻勢迷彩かけとけ」
「了解」

メリーはディスプレイにキーボードを表示そのまま十六桁の暗証番号を入力。

「攻勢迷彩完了。……。さっきのあれ、本気か？」

「さあな」

「レーザー、いつにも増してマジだったぞ。あれを裏切るのは酷だ」
「ああ」

意識の伴わない気のない返事。メリーにとってスペクターの見せる珍しい反応だった。

「二百秒前だ。連結部の解除。エンジン点火」

「了解」

「帰ったら考える」

スペクターはだれにも聞こえないようにひっそりとつぶやいた。

「メリー」

「なんだ」

「生きて帰るぞ」

メリーは答えなかった。その代わりに軽やかな笑い声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911u/>

百合咲く場所

2011年7月16日03時28分発行